

東大で看護を学んだ意味を、実感した父上のこと

秋山先生

このたびは、貴重なご講義をありがとうございました。先生のご経験や具体的なお話を通して、看護の役割と、ケアに携わる者として大切にしたい姿勢について、多くのことを学ばせていただきました。

私は医療現場ではなく、介護現場で働いております。しかし、日々の仕事の中で看護師や医師と連携する機会があり、先生のお話を自分自身の経験と重ねながら拝聴いたしました。看護と介護では専門性や役割に違いがありますが、目の前の患者さんや利用者さんの命と生活を支えるという点で、共通する思いがあると感じました。

特に心に残ったのは、「素人感覚」という言葉です。経験を積むことで、落ち着いて対応できるようになることは大切ですが、支援する側が日常的に行っていることも、ご本人にとっては苦痛や恐怖を伴う場合があります。慣れによって、その気持ちを見過ごしていないか、自分のケアを振り返るきっかけになりました。利用者さんの立場から「怖くないだろうか」「つらくないだろうか」と考える感覚を、これからも大切にしていきたいと思います。

また、先生が東京大学で看護を学ぶことについて、当初はお父様の理解を得られなかったものの、お父様の最期には、ご自身の専門知識や技術を生かしてケアをされたというお話も、深く心に残りました。お父様も、先生に支えられる中で、看護を学ばれたことの意味を実感し、安心されたのではないかと感じました。学んだことを大切な人のために生かす尊さを、先生のお話から学ばせていただきました。

一方で、私は今でも利用者さんの死を受け止めることが難しいと感じています。長く関わり、日々の生活を支えてきた方が突然いなくなると、深い悲しみが残り、気持ちを整理するまでに時間がかかります。死に対する恐怖と、その方を懐かしく思う気持ちが入り交じり、簡単には心が落ち着きません。先生の臨床実習でのお話を伺い、ケアに携わる仕事では、その方と過ごした時間や交わした言葉が、支援する側の心にも深く残ることを改めて感じました。こうした経験に向き合いながら、私自身も少しずつ成長しているのだと思います。

現在の介護現場では、看護師の存在に大きな安心感を覚えます。体調の変化に

ついて相談でき、専門的な視点から判断や助言をいただけることは、介護職にとっても心強い支えです。今回学んだ「まもる」「とどける」「つなぐ」という看護の責任を通して、その安心感の背景にある専門性を、より深く理解することができました。看護と介護が互いの専門性を生かし、一体となって関わることで、利用者さんの安心につながると感じております。

今回の学びを日々の介護に生かし、知識や技術を高めるとともに、利用者さんの痛みや不安に気づける感覚を失わず、一人ひとりに丁寧に向き合ってまいります。

多くの学びと、自分のケアを見つめ直す機会をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

国際医療福祉大学大学院 修士課程 1 年 専攻：医療福祉経営専攻
分野：先進的ケア・ネットワーク開発研究 領域：介護福祉・ケアマネジメント学
氏名：陳萍（チン・ヘイ）